

【書評】境界をめぐる思考の旋律

Saito, Motoki / 齋藤, 元紀

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

46

(発行年 / Year)

2015-03-20

【書評】

澤田直著『ジャン・リュック・ナンシー 分有のためのエチュード』（二〇一三年、白水社）

境界をめぐる思考の旋律

齋藤元紀

「哲・学・そ・れ・自・体・は・人・が・期・待・す・る・場・所・に・は・決・し・て・存・在・し・な・い」。ジャン・リュック・ナンシーは『哲学の忘却』と題した短いテクストのなかで、そう述べている。哲学はいつでも、哲学を求める者の期待を裏切り、その姿を隠す。哲学書のなかにも、哲学の理想のなかにも、生のなかにも、概念のなかにも、厳密な意味での哲学は存在していない。そのため哲学への欲求が、哲学への警戒感や軽蔑と入れ替わるといったことがいつでも起こりうる。だがそれにもかかわらず、哲学への欲求は、決してとどまるところを知らない。それはひとえに、哲学がつねに期待と裏切りの境界を、完成と未完成の境界を揺れ動いているからなのである。そのため哲学を哲学として遂行しようとするなら、思考は哲学のうちに潜むさまざまな境界へとおのれの眼差

しを向け、揺れ動くその境界線を横断してゆかねばならない。とはいえそれゆえに哲学的思考は、おのずと多義性を孕まざるをえなくなる。うねるような思考を展開するナンシーの著作はしばしば難解と評されるが、それはいたずらに事柄を混乱させようとしているからではなく、掴みどころなく揺れ動く境界を横断せざるをえないという、哲学的思考そのものにつきまとうこの困難さに常に真摯に向き合おうとしているからだと言ってよいだろう。

ナンシーは、デリダ亡き後、フランスのみならず、世界で最も注目を集める哲学者の一人である。一九四〇年に生まれ、七四歳を迎えた今も衰えることなく精神的に活動を続けており、これまでに刊行された著作は大小含めればおよそ百点ちかくにのぼる。日本でも主著のほとんどが翻訳

され、高い人気を得ているが、しかし彼の哲学的思考は、先にも述べたように、おのれ自身のうちに潜むさまざまな境界を粘り強く横断してゆこうとする執拗さに加えて、該博な思想史の知識をもってさまざまな領域をも乗り越える軽やかさをも備えているため、その全貌を捉えるのは決して容易ではない。おそらく全くの初心者的好奇心からナンシーの著作を手にとったとしても、その思考の描く複雑な旋律にひたすら面食らうばかりだろう。本書は、そんな壮大な難曲のごときナンシーの思想の核心に迫るための格好の手引きと言える。澤田氏は、ナンシーの博士学位副論文『自由の経験』の翻訳も手がけ、ナンシーと直接の知己があるばかりでなく、専門のサルトル研究をはじめとして、現代フランス哲学・文学のいずれにも通暁している。読者は澤田氏の巧みな演奏によってナンシーの境界をめぐる複雑な楽曲に耳を傾けるうち、おのずとその全体を聴き届けることができるはずである。

本書は、ナンシーの思想を内容にそって四つの領域に区分している(九―十一頁)。第一は初期における「哲学史的アプローチによる、オーソドックスな読解」の領域であり、ヘーゲル、カント、デカルト、ハイデガーとの対決に向けられている。前述の『自由の経験』(一九八八年)もこの領域に属する。第二は、神話や戦争、他者や共同体な

ど「自らの提起するアクチュアルなテーマ」を扱う領域であり、代表作には『無為の共同体』(一九八六年)がある。第三は、絵画や映画やダンス、さらには美術や芸術一般にまでわたる「芸術論」の領域であり、これに属するものとしては『イメージの奥底で』(二〇〇三年)や『肖像の眼差し』(二〇〇〇年)といった著作があげられよう。第四は、二一世紀以後に主に展開された「現代西洋社会」や「政治」をめぐる領域であり、キリスト教絵画をめぐる諸論や『脱閉域』(二〇〇五年)などの著作がそれに属する。本書では、冒頭と末尾に「プレリユード」と「コーダ」が置かれ、「第一部」は第一と第二の領域、「第二部」は第三の領域、そして「第三部」は第四の領域をそれぞれに扱い、上記の主要諸著作の論点を軸としながら、関連著作にも目配りしつつ、ナンシーの思想の全体像が浮き彫りにされてゆく。

まず「プレリユード」では、『侵入者』(二〇〇〇年)を手がかりに、「私とは誰か」という古典的な哲学的問いが、内部と外部の境界をめぐる考察をとおして、「他者とは何か」「われわれとは誰か」といった問いへとナンシーが思考を深めるさまが描き出される。ナンシーは一九九〇年、五〇歳のとき心臓疾患のため心臓移植手術を受けているが、ここではその経験を踏まえつつ、他者がその死をもつて心臓を贈与すること、その他者の心臓が自己の身体のうち

ちに侵入すること、科学技術によつて身体が変容すること、さらには拒絶反応や免疫といった事態に潜む意義が明らかになる。「共同体の義務の免除」という「免疫」の語源からも明らかかとおり、「侵入」という事態は「共同体」の問題へ接続しているという指摘は、慧眼と言えよう(三八頁)。

これを受けて、第一部の1ではまず『無為の共同体』に沿つて、従来の共同体概念への批判と来るべき共同体の姿が究明される。ナンシーによれば、人は自らの「誕生」と「死」、そして「他人の死」によつて限界づけられた有限な「特異存在」であるが、同時にその有限性が複数の「特異存在」によつて「分有」されることで「共同体」が成り立っている。しかもその「分有」は、恋人同士の関係がそうであるように、実のところ「何もしない」という「無為」によつて支えられているのである(六四、六八―六九頁)。ここでは難解な「分有」の概念がじつに分かりやすく読み解かれており、読み応えがある。第一部の2はさらに『自由の経験』を取り上げ、「分有」概念をも敷衍しながら、ハイデガーとの対決のなかで「自由」概念の脱構築を図るナンシーの思考を詳しく究明しているが、さらにその後控える「政治」の問題系への丁寧な目配りも見逃せない(一一五―一九頁)。

第二部の3では、サルトルとフーコーの対立を中心に現代フランス思想におけるイメージ論の系譜を眺めたいうえで、『イメージの奥底で』におけるカントの図式論および構想力論、さらにそれに対するハイデガーの解釈をとおして、イメージを何かの「表象」再現前化(representation)ではなく「呈示(presentation)」であるととするナンシーの主張が明らかにされる。イメージはそれ自体「イメージに先立って、イメージ的な何かが自らをイメージと化し、イメージをなす」ものである(一四五頁)。このイメージの問題は眼差しという視覚の問題と直結しているが、その連関は、第二部の4において、『肖像の眼差し』での「肖像画」の考察をとおしてさらに立ち入つて解明される。肖像はモデルと関係するのではなく、イメージと同じく「それ自身への関係」をもつ(一二二頁)。肖像におけるこの「自己言及性」、すなわち「自律的肖像」の意味をめぐる抽象的なナンシーの思考を、ヘーゲル、現象学、デカルト、ハイデガー、デリダらの思想をも参照しつつ明らかとすることでの究明は、肖像の文字どおり具体的な『イメージ』を読者に喚起してくれるはずである。

こうしたイメージをめぐる議論を踏まえて、続く第三部の1では、宗教画、すなわち西洋における絵画とキリスト教との連関をめぐるナンシーの考察が取り上げられる。こ

ここでは、『訪問』(二〇〇一年)ではポントルモの描いた「聖母訪問」を、また『私に触れるな メリ・メ・タンゲレ』(二〇〇三年)ではティツイアーノらによって描かれたイエスの復活談を、そして『イメージの皮膚』ではボティチェリの描いた「ラ・カルンニア」における裸体と真理を取り上げつつ、キリスト教におけるイメージが不可視と可視、不在と現前、露呈と逃走という緊張関係を孕んでいることが鮮やかに示される。西洋近代思想における視覚優位が西洋文化とキリスト教の発展の連動性にあるとするこのナンシーの洞察は、さらに第三部の6での『脱閉域』でのキリスト教の脱構築をめぐる究明をとおして、さらに明瞭にされてゆく。ここでは、キリスト教と西洋文化との連動性を指摘しつつも、神なき思考の可能性、さらにはキリスト教そのものに内在する脱構築の思考の可能性にまで踏み込むナンシーのラディカルかつスリリングな考察の醍醐味を存分に味わうことができるだろう。そして最後の「コールド」において、上記のナンシーの思考のすべてにかかわる鍵語であると同時にきわめて多義的な「意味Ⅱ方向(sens)」の究明によって本書は締めくくられる。末尾に置かれてはいるが、そこでの議論は初めてナンシーに挑戦しようとする者にとってきわめて有益かつ重要な手引きとなるはずである。

本書は、高度な反省的次元へと複数性を導入し、それ自体分有と多義性を孕みながらもさまざまな境界を果敢に横断し拡大を続けるナンシーの複雑な思考の全体像を、平易ながらも決して学問的水準を落とすことなく見事な筆致で描き出した秀逸な論考と言つてよい。もつとも、ときにナンシーの強靱な思考にいささか押し流されているのではないかとという危惧を抱く場面もあれば、「イメージ」のような「視覚」の問題に定位するあまり、『声の分割』(一九八二年)における「聴覚」の問題や、それに関連する「神」や「解釈学」の問題が見過ごされたのではないかとという疑念がよぎる場面もないわけではない。しかし本書の副題を眺めれば、そうした危惧や疑念も杞憂に終わるだろう。それと気づかせない超絶技巧によってナンシーの境界をめぐる思考の複雑な旋律を柔らかに弾きこなしながら、その背後に隠されたさらなる多声音楽(ポリフォニー)を浮かび上がらせ、そこへと読者の耳を傾けさせることが、おそらくは本書「分有のため」のエチュード」における澤田氏のもう一つの意図なのである。